奄美分館における蔵書構築の軌跡
—鹿児島県立奄美図書館所蔵「島尾敏雄日記」をもとに—

工　藤　邦　彦

【要　　旨】
本稿では、鹿児島県立図書館奄美分館における蔵書構築の状況を初代分館長であった作家・島尾敏雄が遺した日記をもとに考察した。その結果、島尾が企図した蔵書構築では、巡回配本による貸出文庫の整備を重要視していたことが明らかになった。特に昭和36（1961）年7月に龍郷村円小学校で実施した「親子20分間読書運動」を契機に親子読書を目的とした配本が進捗し、奄美群島における読書熱の高揚に貢献した。

【キーワード】
鹿児島県立図書館奄美分館、蔵書構築、島尾敏雄、貸出文庫、親子20分間読書運動

はじめに

鹿児島県立図書館奄美分館（以下、奄美分館と記す）は、奄美日米文化会館（以下、文化会館と記す）を引き継ぎ、昭和33（1958）年から平成20（2008）年の50年間、奄美群島全域における拠点図書館としての機能を果たし閉館した[1)]。伊藤松彦は、平成4（1992）年の時点で「鹿児島の図書館先進地は大島郡であり、徳之島町、大和村、宇検村、住用村、瀬戸内町、竜郷町の各公民館図書室での移動図書館車による資料提供といった読書施設の充実ぶりは、県本土では見当たらない」と町村の図書館活動を支えた奄美分館の蔵書構築を高く評価した[2)]。

蔵書構築とは、「図書館蔵書が図書館のサービス目的を実現する構造となるように、資料を選択、収集して、計画的に蔵書を形成、維持、発展させていく意図的なプロセス」[3)]であるが、初代奄美分館長で戦後を代表する作家の島尾敏雄（以下、島尾と記す）が構築に深く関わっていた。よって、本稿では島尾が主導した選書業務や読書運動から奄美分館における蔵書構築の軌跡を辿る。先ずは、島尾入職前の文化会館および奄美分館設置直後の蔵書構築を概観していく。

1．文化会館および奄美分館設置直後の蔵書構築

奄美大島名瀬には、昭和26（1951）年4月から昭和28（1953）年12月まで、臨時北部南西諸島政庁内の奄美博物館に併設した図書室と米軍政府下でのInformation Center設置命令による大島文化情報会館の両者が存在した[4)]。前者は、兵庫県奄美連盟からの寄贈図書や雑誌約800冊

で開館したが、直後に奄美博物館から分離、大島教育事務局所属の奄美図書館に移行した[5)]。しかし、昭和28（1953）年12月25日の奄美群島日本復帰による「奄美群島に関する日米協定条約」に基づき、奄美博物館と共に解消した。

後者の大島文化情報会館は、昭和26（1951）年4月12日、USCAR[6)]直轄でCI&E Section[7)]の運営による琉米文化会館の一つとして名瀬市（現在の奄美市）井根町に開館した。その後、頻繁に運営態勢を変えながら文化会館が引き継いだ[8)]。文化会館は、昭和29（1954）年5月11日に締結した「奄美日米文化センターに関する協定」によって、全国に10カ所設置された日米文化センターの一つであった奄美日米文化センター（以下、文化センターと記す）を介し、USIS[9)]からの補給図書[10)]の貸与を開始した。同時に大島郡内6町村に向けて巡回文庫を設置し[11)]、昭和29（1954）年6月10日には解消した奄美図書館・博物館の備品の一部を移管した[12)]。昭和31（1956）年11月10日現在の蔵書数は、USCAR図書2,309冊、USIS図書1,765冊、奄美図書館所管蔵書 1,677冊、鹿児島県費購入図書19冊、受贈図書 128冊の計5,898冊であった[13)]。当時、米国事情を紹介する映写会が頻繁に館内や地域の公民館で行われており、映画フィルムの配給が目立った【表1】。

表1　文化会館 映画フィルム配給先一覧表

配給先	数量（巻･本）	備　　考
CIE※	53	琉米文化会館当時から保有のもの
USIS	546	日米文化会館となって昭和30（1955）年2月大使館から配布されたもの
Loaned	13	長崎アメリカ文化センターから借り受けたもの（既に47本が返納済み）

※ Civil Information Education Library（東京日比谷に設置された米国民間情報教育局CIE図書館）配給
大島支庁総務課 1956.『概況報告書：昭和31年11月15日』「奄美日米文化会館統計表」転載

昭和32（1957）年5月、文英吉（かざりえいきち）文化会館長の逝去によって同年6月に当田真延（とうだ みちのぶ）（以下、当田と記す）が館長心得として代行を務めた。同年12月1日付で島尾が鹿児島県職員として入職、文化会館長に就任した。さらに、昭和33（1958）年4月1日、奄美分館の設置に伴い奄美分館長を兼任した【表2】。当田もまた分館長補佐として運営全般を統轄した。

表2　島尾分館長在任中における奄美分館の資料提供および読書運動　沿革

昭和年月日	事　　項
33年4月1日	「県立図書館設置条例の一部を改正する条例」の施行により、奄美分館が名瀬市井根町の文化会館の建物を使用して発足　文化会館長の島尾が分館長を兼任
5月31日	蔵書6,020冊※1)（文化会館蔵書5,053冊、県立図書館購入託送分967冊）で運営開始
10月29日	奄美群島全域に向け、市町村へ貸出文庫事業を開始
35年3月31日	大蔵省財産であった旧奄美図書館蔵書分の除却により、蔵書3,733冊※2)　に減少
36年7月1日	龍郷村円小学校で奄美群島初の「親子20分間読書運動」実施（読書資料の配本開始）
39年4月19日	「鹿児島県図書館協会奄美支部」発足
9月1日	新分館（名瀬市小俣町の旧米軍政府跡地）へ移設（10月15日に落成式挙行）
43年4月1日	「奄美分館発足10周年記念図書購入予算」による新刊図書の購入実施
10月16日	「奄美地区読書運動推進協議会」発足
50年4月1日	島尾分館長退任、榮喜久元鹿児島県立図書館奉仕課長が分館長就任

注）奄美図書館 2017.『要覧：平成29年版』Ⅰ鹿児島県立奄美図書館のあゆみ p 2～3を参照のうえ作表。
※ 1）島尾が編纂した『鹿児島県立図書館奄美分館史稿：昭和39年3月』では5,980冊との記載があり、一次資料によって若干のばらつきがみられる。
※ 2）3,733冊の内訳は、一般用2,036冊、児童用522冊、貸出文庫用245冊、郷土資料124冊、USIS貸与・文化センター用補給図書806冊である（『鹿児島県立図書館奄美分館史稿：昭和39年3月』記載）。

奄美分館における設置当初の奉仕業務は、① 図書の館内並びに館外貸出、② 博物館の公開、③ 映写会、④ レコード・コンサート、⑤ ホールの提供、⑥ 奄美郷土研究会の活動など多岐にわたっていた[14]。具体的に見ると、①を支えた蔵書は、昭和33（1958）年時点で僅か6,020冊であった【表２】。一方、奄美分館では、既述のとおり、日本復帰直後に奄美博物館の所蔵物を移管した関係上、②博物館の公開が求められた。また、③･④･⑤を遂行するうえで視聴覚資料･機器（映写機３台、レコード・プレーヤー２台、オルガン１台）を管理した[15]。⑥奄美郷土研究会の活動は、分館内に事務局を置き毎月第三土曜日の午後２時からの定例会開催、『奄美郷土研究会報』の発刊、郷土資料や博物資料（土器、石器、貝類、ハブやアマミノクロウサギの標本、製陶器、玩具など）の収集・保存であった。しかし、奄美分館が設置時に独立採算制による「かい庁」となったため､大蔵省財産であった奄美図書館及びCI＆E名義の資料を全て国に返還した。併せてUSISからの補給図書の複本も除却した。その結果、昭和35（1960）年３月末時点での蔵書数は3,733冊と大幅に減少した【表２】。したがって、島尾が分館長に就任した頃は「蔵書構成のうえからも零から出発したのと同じ」[16]であった。

ところで、当時の島尾には「作家としての島尾」､「教師としての島尾」､「郷土史家としての島尾」､「図書館長[17]としての島尾」といった４つの側面があった[18]。「図書館長としての島尾」の「日常はつとめ先の図書館に通い、書庫と図書目録と出版資料のあいだをかぎわけつつ、少しでも厚みのある蔵書構成を築きたくて書物えらびにむちゅうになっている毎日」[19]であった。具体的には、鹿児島県立図書館（以下、本館と記す）の支援のもと、奄美群島の隅々まで本を届ける貸出文庫の整備に努めた。貸出文庫とは、「図書館未設置自治体や図書館が遠く日常的に利用できない地域に対して行われる図書館サービスの一種」[20]である。一方､「郷土史家としての島尾」は、奄美郷土研究会を通じ、奄美群島全域の歴史、民俗など文化全般に関わる郷土資料の収集に努めた[21]。また、私生活ではミホ夫人の体調の恢復を願いつつ、家族の再生を期すとともに中央文壇から離れた「作家としての島尾」の立ち位置を模索していた。このように、妻を支える夫として、二人の子どもの父親として、図書館長として、多面性を持った日常を知るには、書き遺した「島尾敏雄日記」（以下､「日記」と記す）[22]を確認することが必要となる。

よって、本稿では奄美分館の後継にあたる鹿児島県立奄美図書館が所蔵している「日記」を用い、「図書館長としての島尾」の記載内容から奄美分館の蔵書構築に関わる業務を検証する。

２．奄美分館における選書業務

昭和34（1959）年設置当初の奄美分館（井根町に設置した奄美分館を以下、旧分館と記す）で「力を入れたのは、島々の町村そして個々の部落のすみずみまで貸出の図書を送りこむこと、郷土資料としての図書、記録、パンフレットなどを収集、整理、分類、保存しようということ」[23]であった。当時、「図書館長としての島尾」は、①分館運営の総括、②図書の選択分類に関すること、③郷土資料の蒐集整理に従事した。なかでも②、③に関わる選書業務について以下、「日記」（記載年月日及び内容）を列挙のうえ、確認する。

■「日記」（１）：旧分館における選書（抜粋）

・昭和34年５月18日～20日　USIS図書分類
・同年８月27日　USIS図書整理
・昭和35年１月19日
　今図書館での仕事は分類と購入図書の選択、そして購入リスト作成

・同年７月26日
出勤直後すぐ、「禁帯」ラベル及び「貴」ラベルを貼る図書を物色する　前者は一般図書の中から（辞書に限る）「貴」の方は郷土資料図書から
・同年８月11日
書庫の棚を見て歩いて蔵書計画のこと色々考えがわき、すぐに整備充実ができないがたのしい
・同年８月31日
今日は午前午後とも受贈図書の古いもの（30～33年）について分類と整理をした
就任以来の懸案の仕事なり、寄贈資料を分類することはしんのつかれる仕事、でも面白い
・同年12月22日
新着図書分類、そのあと次回購入図書リスト作成作業　書庫と資料（各種新聞、書評、出版社パンフレット）の往復　自分で蔵書構成を組み立てて行くのだから、頗るたのしい
・同年12月28日
来春から事務的にもどんどん仕事が出来る（古い寄贈図書、CIE時代の図書の英文・和文図書の編入、分類を済ませておけば一応片がつくことになる）
・昭和36年４月27日
文苑、開文に寄り、両方で１万５千円の図書の買付
・同年５月22日
図書分類と選択のしごと　書庫と往復して蔵書計画を考えるのはたのしい
・昭和39年２月14日
今日は近世古文書（筆写、映写とも）、郷土諸雑誌（殊に「自由」）、名瀬市公報、CI&E図書（いったん廃棄したものの中から、いくらか拾った）等の整理をした　「自由」「新奄美」の所有のもののなかから図書館で欠号しているものをえらび寄贈する

「日記」の記載で先ずは“USIS 図書分類・整理”（昭和 34 年５月、８月記載）に着目する。奄美分館が編集した年報『一年のあゆみ』[24] に拠ると、旧分館では文化会館時代から引き継いだ USIS 補給図書の受入冊数が昭和 34（1959）年度には 87 冊だが、その後暫くはほぼ同数であった。昭和 39（1964）年９月に移設した奄美分館（小俣町に新築開館した奄美分館を以下、新分館と記す）では、昭和 41（1966）年度に 128 冊、昭和 42（1967）年度には 96 冊と書架の狭隘が解消したためか、補給が微増となった。しかし、昭和 43（1968）年度に 46 冊、昭和 44（1969）年度に 52 冊と再び減少に転じ、昭和 45（1970）年度以降は“補給なし”となった。因みに『一年のあゆみ』では、昭和 47（1972）年度まで補給状況が統計表に記載されていたが、昭和 48（1973）年度以降、“USIS 補給”という項目が見当たらない。よって、文化会館における USIS 図書の補給は、昭和 45（1970）年度を境に停止しており、補給図書総数 32,738 冊（昭和 49（1974）年３月 31 日時点）をもって併設の機能が事実上、消滅したと考えられる。

次に、蔵書構成上の内訳を見ていく。設置当初から和図書の購入費目は、①成人用図書、②児童用図書、館外利用を対象とした③貸出文庫用図書、貸与にあたる④ USIS からの補給図書・フィルムおよび寄贈を中心とした⑤郷土資料の５種であった。このうち、①から③は年度を四半期に分け選択、受入を執行した。選択方法としては、出版目録や書評、新聞広告をチェックし、利用者の動向や要望も加味し、購入図書リストを作成（「日記」昭和 35 年 12 月 22 日記載）のうえ、発注した[25]。ところで、島尾は昭和 35（1960）年の春先から十二指腸潰瘍を患い、４ヵ月間入院したが、図書ラベルの貼付といった装備（「日記」昭和 35 年７月 26 日記載）、地元書店（文苑堂、開文堂）での買付（「日記」昭和 36 年４月 27 日記載）など仔細な業務もこなしていた。また、

奄美群島の日本復帰前後に名瀬で出版された『自由』、『新奄美』といった郷土誌を自ら所有しており、欠号分を寄贈し補充した（「日記」昭和39年２月14日記載）。

結果、旧分館における蔵書構築では独自予算を確保のうえ、寄贈図書の受入を行い、館内での資料提供を念頭に整備した（「日記」昭和35年12月28日記載）。しかし、旧分館は建物の老朽化が進み、かつ土地が国有地で借用期限も迫ったため、昭和39（1964）年９月に名瀬市小俣町の旧米軍政府跡地に移設した【表２】。以下、新分館に移設した直後における図書の選択について確認する。

■「日記」（２）：新分館における図書の選択（抜粋）

・昭和40年12月16日
　いろいろな書物の存在、それに目をくばって図書構成を個性的なものにして行くたのしみ、弱い部分を次第にうめて行くたのしみ
・昭和42年３月15日
　新規購入図書の選択の仕事にかかる　新年度からは館内一般図書だけぼくの担当
・同年４月19日
　新年度第一四半期図書購入費（約30万）について当田（館内児童）、求（貸出）とぼく（館内一般図書）の選択配分比をきめる
・昭和44年１月25日
　本館からの連絡で予算の内示があった　図書費は約80万から150万に
・昭和45年12月５日
　終日 図書選択の仕事 これはたのしい　選択しつつ、関連発展して書物を読む

新分館では、本館の措置で「発足10周年記念図書購入予算」が特別編成され【表２】、図書費がそれまでの年間約80万円から150万円に増額となった（「日記」昭和44年１月25日記載）。だが、島尾にとってこの時期は苦難の連続であった。昭和44（1969）年２月、新分館近くの河川で自転車転落事故に遭い、名瀬市内の病院に約５ヵ月入院し療養した。事故の影響で以後、数年にわたり気鬱に悩まされ、創作の停滞を抱えてしまうが、館長退任まで館内一般図書の選択を担当した（「日記」昭和42年３月15日、昭和45年12月５日記載）。

整理すると、「図書館長としての島尾」の選書業務には、①新着図書の検収、②四半期ごとの購入図書リストの作成、③予算配分の決定（「日記」昭和42年４月19日記載）、④不用図書の除籍・廃棄手続が挙げられる。これらは館外への資料提供を優先した蔵書構築でもあり、提供を促進する方途として新たに巡回配本による貸出文庫を採用し、その整備を急いだ。

３.「図書館長としての島尾」による貸出文庫の整備

既述のとおり、奄美分館における地域住民への奉仕とは「ほぼ５つの離れ島に分かれている受持区域のなかのどの離れ島にも図書を送って、住民に広く読書の機会を与えること」[26] いわゆる、資料提供を指す。具体的には各町村の社会教育主事の支援を取り付け、「貸出文庫を設けることによって、幾組かの図書のセットを各離島の町村にも送りこむこと」[27] という団体貸出方式を模索していた。

島尾は館長就任当初、「資料の絶対数がおそろしく貧弱であること、われわれ図書館員が習熟していなかったことのために、ただ型通りの配本がせいいっぱいであった」[28] と昭和39（1964）年

４月、鹿児島県図書館協会奄美支部（以下、奄美支部と記す）の発足時【表２】に述懐した。配本の改善を図るべく旧分館では『鹿児島県立図書館奄美分館出張所設置規程』（案）（以下、『設置規程』（案）と記す）を策定し[29]、配本の拠点として貸出文庫出張所（以下、出張所と記す）を新たに設置した。『設置規程』（案）は全14条からなり、目的として「出張所の設置を認可された市町村は分館から随時配本される図書を保管し、一般公衆の利用に供し、その教養調査研究、レクリエーションに資すること」（第３条）を掲げた。したがって、出張所は「図書館法」（昭和25（1950）年４月施行）第２条ならびに第３条 図書館奉仕５ 「分館、閲覧所、配本所等を設置し、及び自動車文庫、貸出文庫の巡回を行うこと」と同様の役割を担っていた。さらに『設置規程』（案）には、「図書の利用徹底ならびに読書の啓蒙宣伝」（第４条）、「出張所には書架を設置、図書室での閲覧、個人・団体貸出し」（第10条）とあり、読書活動の推進を主眼に置いた。

出張所は、昭和 33（1958）年 10 月 29 日、名瀬市内の朝日校区に設置したのを手始めに昭和 34（1959）年６月 28 日の瀬戸内町をもって各町村の教育委員会事務局や中央公民館への設置（17 カ所）が完了した。加えて、運営の標準化を図るため、昭和 36（1961）年４月には『貸出文庫運営要項』を策定した【表３】。以下、貸出文庫の整備状況を確認する。

表３　貸出文庫運営要項（昭和 36 年４月 10 日決裁）

第１条	鹿児島県立図書館奄美分館（以下分館という）の、貸出文庫の運営は、この要項の、定めるところによる。
第２条	貸出文庫は、各市町村等において設置した、貸出文庫出張所に、定期的に、配本するものとする。
第３条	貸出文庫の配本は、自動車・船舶等による、出張配本、及び、託送配本により、行うものとする。
第４条	貸出文庫出張所で、貸出文庫を利用する期間は、３ヵ月を原則とする。
第５条	貸出文庫として、配本する冊数は、１個につき、35 冊以内とする。
第６条	貸出文庫の、託送配本の際の、運送料は、送付の時は、分館の負担とし、返送の時は、各貸出文庫出張所の負担とする。但し特別の場合は、分館において、その全額を負担する。
第７条	貸出文庫を利用する、貸出文庫出張所では、利用状況を、分館に報告するものとする。
附　　則	第８条　この要項は、昭和 36 年４月１日から施行する。

注）奄美分館 1961.『一年のあゆみ：昭和 36 年度』転載

■「日記」（３）：貸出文庫の整備状況（抜粋）

・昭和34年１月10日　貸出文庫編成（笠利・朝日校区）
・同年２月３日　龍郷貸出文庫編成　、４日　大和貸出文庫編成
・同年３月26日　瀬戸内 西田社会主事来、貸出文庫設置取りきめ
・同年３月30日　朝日校区、笠利、竜郷 貸出文庫セット作り
・同年12月７日
　各部落への実質的な読書活動をどうすすめるかについて各職員の出張経験を基にして検討
・昭和35年６月20日
　当田さんが巡回文庫配本の職員出張割案を示す 明日当田氏 先ず南大島地区に出る
・昭和36年３月31日
　出張中きいてきた貸出文庫出張所からの要望は、必ず何らかの回答を出すこと
・同年５月16日
　町役場の自動車で屋仁に 学校で集会、一般の会合を終え、読書グループ、主として青年団男女との貸出文庫についての意見交換
・同年５月20日
　屋仁読書会のセットを組んで帰宅

・昭和38年11月２日～３日
与論出張の折の貸出文庫用に新聞広告、書評紙などに出ることの少ない通俗小説をえらび出すこと
・同年11月14日
貸出文庫用購入図書表（第３四半期）完成
・昭和41年３月８日
午後、研究会（図書館事務）のしめくくりとして貸出文庫事務などの話し合い　分館の仕事の簡素化、運用は全部、センター（サービスセンター）まかせの事提案
・同年４月16日
午後はサービスセンター会議、入部氏の本県サービスセンターの状況説明のあと、分館図書配本をセンターまでにすることを提案（今まで各読書グループまで配本した）し、了承を得た
・昭和45年７月３日
臨時職員会、市町村配本を年３回から年２回に切かえる事についての検討
・昭和48年４月17日
午後は主事会に行く　二時から図書館の時間、サービスセンター会議と県図協会奄美支部総会は公民館の方に移したいという相談をもちかけて賛成を得る
・同年10月29日
岩崎自動車の借上車で戸円に行く　戸円小校庭の全校生徒のまえではなしをさせられる
小学生・中学生合わせて６～70人、移動図書館設置の説明など

旧分館では、昭和34（1959）年以降になると、各出張所に向けた文庫編成に取り組んだ（「日記」昭和34年１～３月記載）。その後、喜界町中里、瀬戸内町南など読書グループ単位での出張所設置が進んだ【図１】。当初、貸出文庫に関する業務には選択、組込、発送、回収、整理があり、分館職員が各出張所の要望を聞きながら（「日記」昭和36年３月31日記載）、借上自動車、ジープ、船舶を利用し、集落まで配本するケースも多かった[30)]。また、配本冊数は30冊で試行し、昭和36（1961）年の「運営要領」に沿い35冊【表３】、さらに、昭和38（1963）年11月には50冊と増冊した[31)]。別途、読書グループに対しては15冊の配本を追加し補った。

出張所は、昭和38（1963）年１月公布の「鹿児島県立図書館運営規則」に基づき、名称をサービスセンターと改めた[32)]。その際、巡回先は７地区（北大島、中部大島、南大島、喜界、徳之島、沖永良部、与論）を選定し、各サービスセンターが読書会、婦人・成人・青年学級等へ配本する態勢となり【図１】、教育委員会事務所の力を借りた[33)]。その結果、朝日校区、古仁屋、赤木名といった比較的人口の多い地域では、閲覧冊数が着実に伸長した【図１】。また、佐仁のように親子読書会が運営する集落では、全てを児童用図書の配本に特化するケースもあった。

昭和41（1966）年頃になると、サービスセンターに配本の要望が集中し、新分館もまた文庫の編成に追われ、やむなく自治体・集落・読書グループによる自主的運営を促した（「日記」昭和41年３月８日記載）。その結果、配本方法をサービスセンターまでの託送のみとする措置（「日記」昭和41年４月16日記載）を取った。また、奄美支部主催の図書館事務研究会での協議により、新分館は後方支援に廻りサービスセンターの主体的な運営のもと、配本形式を年３回から２回に変更した（「日記」昭和45年７月３日記載）。さらに、巡回配本が定着すると、戸円小学校での児童への講話（「日記」昭和48年10月29日記載）といった読書活動の推進を図った。その背景には、本館からの読書運動普及の要請があった。細部について次に触れる。

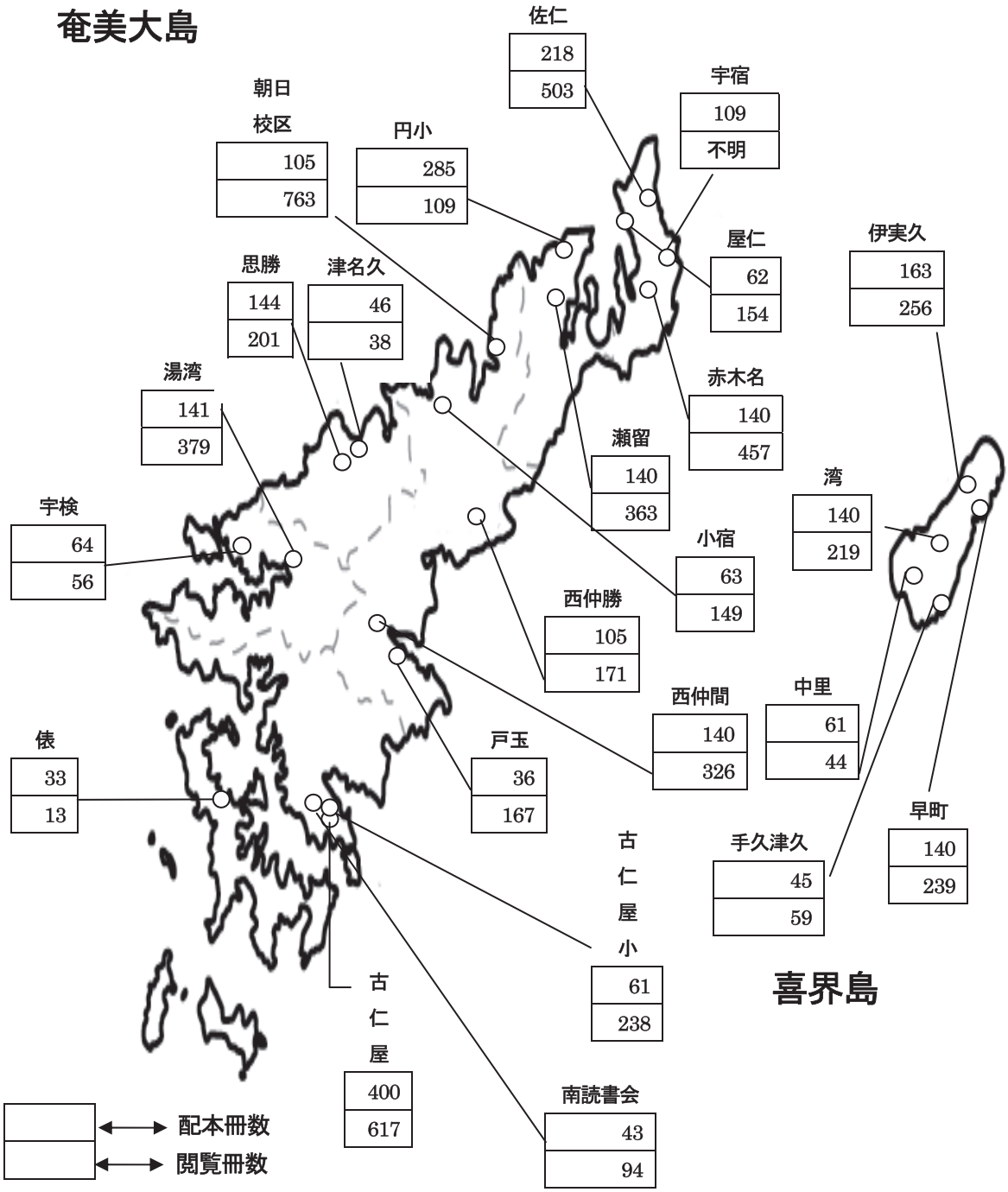

図１　奄美大島・喜界島における 昭和 37 年度 貸出文庫出張所 配本状況

注）奄美分館 1962.『一年のあゆみ：昭和 37 年度』掲載図から閲覧冊数を加筆修正した。

４．奄美での「親子 20 分間読書運動」：集落に向けた図書の配本

奄美大島名瀬における読書推進事業は、読書週間（毎年 10 月 27 日～ 11 月９日）の関連行事として行われてきた。その嚆矢は、文化会館主催による昭和 32（1957）年度名瀬地区読書週間運営委員会の結成である[34]。参加組織・団体は、大島教育事務局、名瀬小・中学校、名瀬市書籍商組合、名瀬市教育委員会、鹿児島県教職員組合奄美支部、大島支庁職員組合文化部であった。同委員会は、昭和 35（1960）年度に読書運動推進協議会へと名称を変更したが、昭和 37（1962）年度には住用村戸玉に移動図書館を臨時に開設した。このように、群島内で独自の読書運動を展開していたが、直ぐに鹿児島県による読書推進事業として久保田彦穂鹿児島県立図書館長（＝児童文学者の椋鳩十）が創案した「母と子の 20 分間読書」へ収斂された。この運動とは「教科書以外の本を、子どもが 20 分間くらい読むのを、母がかたわらにすわって、静かに聞く。たったこれだけのことである」[35] と久保田館長が説いたものであった。

本館では、昭和 35（1970）年、運動の名称を「母子」から「親子」と改め「親子 20 分間読書運動」（以下、「20 分間読書」と略す）と名付け実施した。旧分館では、昭和 36（1961）年２月１日、２日開催の社会教育主事会および同年４月 16 日開催の図書館事務研究会で入部兼弘本館地方奉仕課長による「20 分間読書」の実践報告があった。これを受け、同年７月、奄美群島で初めて龍郷村円小学校【写真１・２】が「20 分間読書」に着手した[36]。円校区は三方を山で囲まれ、北側が東シナ海に面し季節風にさらされる“荒波（あらば）”と呼ばれる地域にある。一集落一校区であり、保護者の教育への関心は深く何事にも協力的で向学心も強いという[37]。以下、円小学校での実践について「日記」で触れている箇所を確認する。

写真１（左）・写真２（右）　現在の龍郷町立円小学校（平成 29（2017）年 11 月 13 日 筆者撮影）

■「日記」（４）：円小学校における「20分間読書」の実践

・昭和35年11月25日
　貸出文庫用児童図書を５万円分購入するためのリストを作成にかかる（親子二十分間読書運動の分館分としてのそれを、分館の事情を話し、そのようにすることを認めてもらった 館長から先日鹿児島で）
・昭和36年６月２日
　竜郷の円部落で親子読書運動をはじめたいから、一度来てほしいと東郷社教主事から
・同年６月12日
　円の校長が親子20分間読書運動のことで来館
・同年６月13日
　２時頃から職員会議　親子 20 分間読書運動のための検討会

・同年６月20日
　２時頃より小学校でPTAの委員のひとたちに親子20分読書運動の概略説明　そのあと宿直室で懇談会　夜、部落公民館ではなしをした　10時過ぎ旅宿先で部落の婦人会の幹部の人二人が東郷主事と会の運営について話し合うのを傍聴
・同年７月１日
　円への親子20分の図書Setting
・同年７月３日
　当田と親子20分読書運動に対する分館の方針について話していると中村、西記者来たのでおさらいのかたちで両氏に分館のその運動に対する方針と現状を語る
・昭和38年２月８日
　４時頃、円小学校の磯村武彦校長来て、母子20分についての要望など

本館では旧分館に対し、昭和 35（1960）年度予算で「20 分間読書」用図書の購入費を初めて配分した。しかし、島尾は貸出文庫の整備途上にあったことを理由に執行を見送り、貸出用児童図書費に転用した（「日記」（昭和 35 年 11 月 25 日記載）。一方、既述したとおり、入部地方奉仕課長の報告会を聴いた磯村武彦円小学校長が集落での実施をいち早く旧分館に要望した。これを受け、龍郷村の東郷社会教育主事が仲介のうえ、島尾は円集落を訪れ実施の確約をした（「日記」昭和 36 年６月 20 日記載）。但し、旧分館からの配本にあたり、校区全体で実施するには冊数が足りず、初回は５年生全 21 名を対象に読書期間を７月８日から８月 31 日まで設定し、「20 分間読書」用図書を配本した。その内訳は童話・物語 14 冊、伝記３冊、科学読物３冊、伝説１冊の計 21 冊であった。配本に際し、島尾のエッセイ『田舎司書の日記』[38] には貸出文庫と「20 分間読書」との配本のバランスに苦悩した様子が描かれている。ところで、円小学校で親子読書が浸透した背景には当地の就業状況にあったと考えられる。当時、円に住む父親の多くが校区内の工場で染め物や締め機を扱い、母親らは紬織りをするなど大島紬に関わる家内手工業に従事した世帯が殆どであった。このことで保護者が子どもに接する時間をある程度確保できたことが普及の一因ではないかと思われる[39][40]。以後、旧分館では円小学校と同様に貸出文庫用図書を「20 分間読書」用図書として取り扱い、奄美群島全域の学校および読書グループに向けた巡回配本へと転換した。

■「日記」（５）：奄美群島全域への巡回配本の実施

●喜界島
・昭和36年７月５日　講話（館外：読書活動、農業文庫、親子20分間読書）
・同年７月６日
　喜界高校、喜界中校区PTA講話（個性を認める基礎としての読書、図書館運動としての親子20分読書）
・同年７月７日 上嘉鉄小学校、８日　早町小学校　親子20分読書
●沖永良部島
・昭和38年11月14日
　国頭の青年団長来て読書グループへの配本を中心に徳、東、萩原と彼と話し合う
●徳之島
・昭和39年３月11日
　犬田布小 座談会（母と子の20分間読書のこと、方言のこと、日米文化会館のこと）

・同年３月13日
　亀津小（母と子の20分間読書について約１時間半話す　母親たち約20人）
●与論島・徳之島
・昭和39年５月４日
　午後は職員会議　那間小と知根小に親子20分間読書用、徳之島町５箇所に読書グループ用図書配本のこと決定する
●奄美大島全域
・昭和39年７月21日
　笠利、竜郷、住用、宇検、瀬戸内、名瀬などの読書実態の報告
　根本的な図書館の態度として実生活に結びついた図書利用という事を話しあう
・昭和43年10月14日
　奄美大島地区の読書運動推進協議会をひらき、分館長室で今年の読書週間の打ち合わせ
　低調ゆえ解散して各機関がそれぞれやることにしてもいいと言ってみた
・昭和47年10月18日
　奄美小 家庭教育学級で子どもたちにいつどんな書物を与えるかというようなはなしをする
　若い母親たちの活発な質問　会が済んだあとも校長室で

「20 分間読書」は、昭和 37（1962）年から昭和 39（1964）年にかけて、喜界町伊実久親子会、沖永良部島知名町上城小学校、笠利町佐仁小学校、宇宿親子グループ、名瀬市芦花部小学校で順次行われた[41]。昭和 39（1964）年以降は、新分館に設置した貸出文庫専用室での効率的な配本が可能となった[42]。しかし、昭和 43（1968）年頃から分館職員の熱意とは裏腹に「20 分間読書」の伝播は停滞した（「日記」昭和 43 年 10 月 14 日記載）[43]。その理由のひとつとして、当時の名瀬市には博物館設置の機運が高まり、新分館でも郷土資料の収集・保存に専従していたことが挙げられる。例外的に円小学校の親子読書は、運営方式を変えつつも継承がなされてきた。昭和 49（1974）年４月からは中央公民館の放送設備を用い、夕刻に児童が当番制で音読を流す「夕読み放送」を開始した。「円小学校家族読書会」では集落と学校とが連携し読書の灯を絶やすことなく、今なお「読書を生活にしみこませる運動」[44] が集落の生活のなかに根付いている。

おわりに

本稿では「図書館長としての島尾」が遺した「日記」をもとに奄美分館における蔵書構築の軌跡を辿った。その結果、奄美群島における公共図書館活動の黎明期ともいえる旧分館での奉仕は、文化センターによる USIS 図書の貸与や映画フィルム・レコードの補給といった受容的な資料提供に止まっていた。だが、「離島のすみずみにまで図書がしみこんで利用されるようになる」[45] ことを目標に選書業務を確立し、主体的な資料提供へと転換した。さらに、新分館では USIS 図書の補給停止を前後して、各集落に設置したサービスセンターへの巡回配本による貸出文庫の整備を重要視した。例えば配本冊数の推移をみると、開始直後の昭和 34（1959）年度には 4,355 冊だったが、昭和 48（1973）年度には 9,700 冊と倍増したことからもうかがえる[46]。この間には「20 分間読書」の普及とともに、集落での読書活動の推進が図られていた。

さらに、館外への資料提供を念頭に置いた選書業務をみると、旧分館では島尾が企図した蔵書構築に基づき、昭和36（1961）年における龍郷村円小学校での「20分間読書」の実施を契機に小・中学校での親子読書会や読書グループへの配本が進捗し読書熱の高揚に貢献した。しかし、

「20分間読書」は限定的な導入にとどまり頓挫したかに見えたがその一方で、円小学校に倣い、昭和55（1980）年度には新分館の提唱による「朝読み・夕読み運動」の実施といった新たな読書推進事業が創成した。このような読書習慣の定着を目指す試みが、昭和55（1980）年に開館した沖永良部島和泊町立図書館をはじめとする奄美群島における町村図書館設置の足掛かりになったと考えられる。

なお、本稿では「図書館長としての島尾」という観点から、主に選書業務に焦点を当て蔵書構築の状況を考察した。しかし、島尾には名瀬在住当初に鹿児島県立大島高等学校、大島実業高等学校定時制の非常勤講師として国語科を担当、加えて、昭和 42（1967）年７月には図書館利用者と協同で読書会『島にて』を創設するといった「教師としての島尾」の側面も存在した。したがって、島尾の根底にある読書理念や児童生徒に向けた読書指導法を注視することで、蔵書構築への企図が詳らかになり、読書熱の高揚といった貢献を提示することがいっそう可能となる。このような「教師としての島尾」の観点からの具体的な考察については、今後の課題としたい。

【謝辞】

本稿を草するに際し、島尾伸三、潮田登久子ご夫妻、石塚一哉鹿児島県立奄美図書館長、中村成美指導主事、徳永順美龍郷町立円小学校長にご指導、ご助言を仰ぎました。また、「日記」原本の閲覧では、かごしま近代文学館のご支援をいただきました。深謝申し上げます。

【注】

１）後継にあたる図書館は、奄美群島全域の中央館へと昇格し平成 21（2009）年４月 23 日に鹿児島県立奄美図書館として奄美市名瀬古田町に開館した。

２）伊藤松彦「南点」（『南日本新聞』平成４（1992）年１月７日掲載記事「離島の図書館」）

３）日本図書館情報学会 2013.『図書館情報学用語辞典』第４版 丸善出版.　p137

４）井谷泰彦 2007.「「道之島」に本を担いで：奄美の図書館長・島尾敏雄」. 日本図書館文化史研究会編『図書館人物伝：図書館を育てた 20 人の功績と生涯』日外アソシエーツ.　p211 ～ 232

５）間弘志 2003.『全記録分離期・軍政下時代の奄美復帰運動・文化運動』南方新社.　p317 ～ 319

６）ユスカー（United States Civil Administration of the Ryukyu Islands）は、琉球列島米国民政府の略称。

７）民間情報教育部（Civil Information and Education Dept.）の略称。

８）大島文化情報会館は、昭和 27（1952）年に奄美琉米文化会館へ名称を変更した。さらに昭和 28（1953）年 12 月 25 日の奄美群島日本復帰に伴い、奄美文化会館の名称を用いたのち、奄美日米文化会館に改称した。

９）米国大使館文化交換局（United States Information Service）の略称。

10）東京の米国大使館から補給された図書は、昭和 31（1956）年５月末現在 2,758 冊であった。

11）大島支庁総務課 1956.『概況報告書：昭和 31 年 11 月 15 日』

12）島尾敏雄 1964.『鹿児島県立図書館奄美分館史稿：昭和 39 年３月』複写版

13）前掲書 注 11）「奄美日米文化会館統計表」に基づく。

14）島尾敏雄 1959. 分館の現状と将来の計画.　鹿児島県立図書館編『南の窓：鹿児島県立図書館報』12 号ｐ２～３

15）前掲書 注 12）

16）島尾敏雄 1961.「季節通信」.『島尾敏雄全集 第 16 巻』晶文社.　p263

17）島尾は鹿児島県立図書館奄美分館長兼日米文化会館長であったが、本稿では図書館長と記す。

18）拙稿 2016. 文人図書館長・島尾敏雄コレクションの形成過程に関する一考察.　『別府大学紀要』第 57 号 p73 ～ 85

19）島尾敏雄 1966.「このごろ」.『私の文学遍歴』未来社.　p197

20) 前掲書 注３）p34
21) 豊浩子 2015. 戦後の奄美琉米文化会館 / 県立図書館奄美分館の歴史的経緯に関する考察. 『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』９号 p73 ～ 93
22) 奄美図書館で確認した日記とは、長男の島尾伸三氏が平成24（2012）年９月、奄美図書館に寄贈した複写物10,217枚である。複写物は奄美図書館がNo.１（昭和５年 １月 １日～昭和５年12月31日）からNo.171（昭和61年１月１日～昭和61年11月９日）までを製本冊子で所蔵している。因みに図書館長在任時の日記はNo.104（昭和32年９月１日～昭和33年５月31日）からNo.144（昭和50年３月18日～昭和50年８月10日）までが該当する。
23) 前掲書 注 16）p263
24) 奄美分館 1962.『一年のあゆみ：昭和 37 年度』
25) 当田真延 1969.「ある触発」. 奄美分館編『島の根：昭和 44 年度』
26) 前掲書 注 14）ｐ３
27) 前掲書 注 14）ｐ３
28) 鹿児島県図書館協会奄美支部 1964.『鹿児島県図書館協会奄美支部だより』第１号ｐ２～３
29) 奄美分館 1958.『県立図書館奄美分館要覧：昭和 33 年５月末現在』
30) 奄美分館 1959.『要覧：昭和 34 年版』p14
31) 前掲書 注 12）
32) 名瀬市教育委員会 1993.『戦後の奄美教育誌：復帰 40 周年記念』p243
33) 前掲書 注 16）p259 ～ 270
34) 前掲書 注 12）
35) 椋鳩十 1961.『母と子の 20 分間読書』あすなろ書房
36)『南海日日新聞』昭和 36（1961）年７月４日 掲載記事「農村（竜郷村円）で芽生える親子二十分読書運動」
37) 平成 29（2017）年 11 月 13 日、円小学校で実施した徳永順美校長への聞き取り調査による。
38) 島尾敏雄 1982.「南島エッセイⅠ：田舎司書の日記」. 『島尾敏雄全集』第 16 巻 晶文社. p184 ～ 189
39) 徳永順美龍郷町立円小学校長提供資料（龍郷町立円小学校親子読書会 平成９年８月 22 日 奄美分館開催「親子読書研修会」、「円小学校沿革：読書関係」）
40) 奄美分館 1963.『親子二十分読書運動：竜郷村円小学校のあゆみ』に拠れば、昭和 36（1961）年度は、計３回の配本読書期間（第２回は昭和 36 年９月１日から 11 月 12 日まで、第３回は昭和 36 年 11 月 14 日から昭和 37 年２月 14 日まで実施）を設定し、その間も座談会や反省会を行い、現況の確認や今後の運営方法について協議していた。
41)『南海日日新聞』昭和 37（1962）年９月 10 日 掲載記事「伸びる巡回図書」
42) 奄美分館 1964.『図書館案内：新築落成記念 1964.10』
43) 萩原富士郎 1972. 親子二十分間読書の奄美分館における回顧と展望. 『鹿児島図書館協会奄美支部だより』第８号ｐ６～ 10
44) 島尾敏雄「最近の図書館の動向」（『南海日日新聞』昭和 33（1958）年 10 月 26 日掲載記事）
45) 前掲書 注 14）ｐ３
46) 奄美分館 2009.『鹿児島県立図書館奄美分館閉館記念誌』p54

【参考文献】

奄美分館 1964.『親子 20 分読書運動の記録：第２号』
奄美分館 1964.『図書館案内：新築落成記念 1964.10』
島尾敏雄 1964.『鹿児島県立図書館奄美分館史稿』昭和 39 年３月複写版

島尾敏雄 1965．図書館のあゆみ．鹿児島県教育委員会編『戦後の奄美の教育：祖国復帰10周年記念誌』p142 ～ 147
井谷泰彦 2015.「ヤポネシアと図書館長：南島における島尾敏雄の一断面」．島尾伸三、志村有弘編『島尾敏雄とミホ 沖縄・九州』鼎書房．p185 ～ 193
龍郷町立円小学校 2017.『円小学校学校要覧：平成29年度』
拙稿 2017．奄美分館長兼奄美日米文化会館長島尾敏雄の仕事：生誕100年遺された日記を読み解く．『図書館学』No.111 p 9 ～ 19